（ 続紙 １ ）

京都大学	博士（経済学）	氏名	秦 佳音
論文題目	Female Internationally Mobile Employees in Japan: Agentic Experiences of Crossing Boundaries and Constructing Identities		

（論文内容の要旨）

本論文は、世界経済および企業経営のグローバル化に伴って増加している女性でかつ国際移動を伴う従業員(internationally mobile employees: IME)について、中でも日本で働く女性IMEを具体的な調査対象とし、彼女らが国境や文化、制度などの様々な境界を越えて企業で仕事をする際に、どのように困難を克服してキャリアを発展させていくのかの理解を深めることを目的とするものである。とりわけ、外国人という特徴、ジェンダー的視点、母親である場合の特徴、およびそれらの交差性を考慮した上で、彼女らの環境適応行動およびアイデンティティ・マネジメントのあり方に焦点を当てている。

第１章において本論文で扱うトピックの学術的背景と研究目的が示された後、第２章では、国際ビジネス分野で行われてきた女性IMEの研究を、女性IMEが越境する境界概念を焦点に当てた上でレビューしている。システマティック・レビューの手法とBibliometric analysisを利用することによってレビューの客観性と可視化性を高めつつ現状のリサーチギャップを明確にする工夫を行った結果、女性IME研究で扱われる境界が地理、制度、社会文化、職業・知識、個人内にまたがるものを含み、伝統的な海外駐在員の研究やジェンダー研究に加え、国際移動やダイバーシティなどの比較的新しいトピックスが増加傾向にあることを示している。また、ジェンダーに特化した理論を用いた研究はまだ少ないことを指摘している。

第３章では、日本で働く女性IMEを対象とし、キャリア・エージェンシーと個人-環境適合の理論枠組みを用いることによって、キャリア・エージェンシーがいかなる形で女性IMEの日本の環境への適応に影響するのかについての探索的な実証研究を報告している。インターネット上で公開されているブログデータおよびインタビュー調査によるデータの分析の結果、日本で働く女性IMEが外国人かつ女性であることによって職場環境との不適合状態を作り出すが、彼女たちがキャリア・エージェンシーを生かした複数の方略を用いることで環境との適合性が高まっていくプロセスを明らかにした。さらに、女性IMEの中でも自発的海外勤務者（self-initiated expatriate: SIE）がキャリア・エージェンシーによって現地への適合を実現することで現地での長期滞在志向につながるというプロセスを示唆する結果も得ている。

第４章では、母親である女性IMEが、仕事に従事するにあたって自らのアイデンティティをいかにマネジメントするかについて、アイデンティティ・ワークの理論枠組みを用いた探索的研究の結果を報告している。日本で働く母親であるIMEへのインタビュー調査を分析した結果、母親であるIMEは、仕事において外国人、女性、母親という交差性を有するゆえの多重的なテンションに対処する必要があること、その上で、自らの職場における競争力を高め、仕事や家庭の負荷を低減し、交差性に起因するアイデンティティの複雑性を低減するための複数の方策をおこなっていることを明らかにした。それによって、母親であるIMEを組織内での弱者として理解する偏った視点から、彼女らが主体的に環境に働きかけたりアイデンティティ・ワークを行ったりする存在でもあることを考慮するバランスの取れた理解への道筋を見出した。

第５章では、総合考察として、本研究の主な理論的貢献及び実践的含意を整理している。女性IMEが境界を超えて異質な環境で働く際に、複数のマイノリティ的属性の交差性が組織特性と相互作用することによって様々な困難が生じるが、彼女らがそれ

らの困難を克服して新たな環境に適応していくプロセスを明らかにしたことにより、本研究が国際ビジネスや国際人的資源管理、ジェンダー研究、組織マネジメント研究に対して学術的な貢献をしていることを示している。また、将来研究として本研究の対象が移民の女性起業家などに拡張していく可能性なども論じている。実践的含意としては、女性IMEを雇用する組織が彼女たちに行うべき支援のあり方や、女性IME本人が環境への適合度を高めるために行うことが可能な方略を明らかにしたことを論じている。最後に、第６章の結論で本論文を締めくくっている。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

世界経済および企業経営のグローバル化に伴い、多国籍企業において本国から海外拠点に派遣される海外駐在員以外にも、これまでの企業経営および経営学では脚光を浴びてこなかった新しいタイプの国際移動を伴う人材が増加しており、これらの人材を対象にした学術研究の推進が急務となっている。本論文は、そのようなタイプの人材の１つである女性IMEを扱ったものである。女性IMEの研究は学術的な新規性を有するのみならず、国際社会においてダイバーシティ・エクイティ＆インクルージョン(DE&I)を推進する上でも重要である。それに加え、本研究は以下に示すように大きく３つの貢献がある。

第１の貢献は、本研究によって女性IMEの環境適応行動やアイデンティティ・マネジメントを理解するための理論的枠組みの構築が促進され、それをさらに押し進めるための将来研究への道筋が切り拓かれたことである。とりわけ、先行研究のレビューによって女性IMEの特徴を反映した固有の理論枠組みの重要性を特定した上で、その要求を満たす形で２つの実証研究がなされ、探索的・帰納プロセスによってキャリア・エージェンシー、個人-環境適合、アイデンティティ・ワークといった理論枠組みを統合することの有効性を見出した。将来研究でこの統合がさらに進むことによって女性IMEの研究が大きく発展することが期待される。

第２の貢献は、本研究によって、社会的なマイノリティに属する外国人や女性、そして働く母親を、受動的な社会的弱者として理解するのではなく、積極的に環境適応行動を行う主体として捉える理論枠組みや視点を提示していることにある。本研究で構築された理論枠組みや提供された視点は、組織においてDE&Iを推進していく際に女性IMEを含むマイノリティに属する人々をどう理解し、どう支援していくかについての実践的な含意を有している。

第３の貢献は、本研究テーマの研究を推進する上で女性IMEが直面する困難が際立つ環境として日本の文脈を選んでいることや、Bibliometric analysisやブログデータを用いた質的分析など新規性の高い方法論を取り入れるなど、研究成果を生み出しやすくするための工夫が随所で見られることである。これらの創意工夫の一部は、今後の経営学研究一般に普及していく手法を先取りして実施したものであるともいえる。

しかしながら、本論文にもいくつかの問題点はある。例えば、本研究で扱っているIMEやSIEなどの概念定義や概念間の関係の扱いにやや曖昧な点がみられる。また、第３章で報告された実証研究の成果では、ジェンダー特有の視点に焦点を当てた理論的貢献が弱いため、男性を含むIME一般に広く当てはまる理論枠組みの提示に留まっている印象を与える。さらに、第４章の実証研究から得られる実践的含意は、研究結果から固有に導き出されたものというよりは、一般的に示唆されている内容に留まっている部分が多いと感じられる。

ただし、これらの諸問題は、著者が今後の研究において取り組むべき課題であり、博士論文としての評価を著しく低下させるものではない。よって、本論文は博士(経済学)の学位論文として価値あるものと認める。また、令和５年１２月２２日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

要旨公表可能日：令和　年　月　日以降